

神奈川県下の須恵器

神 沢 勇 一

神奈川県下においては、須恵器は古墳時代後半になって初めて出現し、以後、奈良時代まで存続する。しかしながら、この期間の主体をなす土器は、東日本一般の場合と同様に、土師式土器であり、須恵器はきわめて少なく、しかも日常生活用具としてよりも、副葬品にあてられたものが大部分である。このような須恵器のあり方は、本地域だけの特性ではないが、古墳時代前期に既に須恵器が存在し、そのご、かなりの普及がみられる近畿地方の場合とは著しく異なっている。

こうした事情もあって、県下における須恵器の研究はまだ進んでおらず、各器形の形態の変化、器形の組成等については、およその傾向は把握されてはいるものの、不明な点が多く、確実な編年を行ない得るまでに至っていない。したがって、ここでは、概要を簡単に述べるだけにとどめる。

本地域における須恵器の出現時期は、土師式土器の後期に位置づけられる鬼高式土器の後半の土器から伴出するので、ほぼ6世紀なかばと考えられる。鬼高式土器の前半の段階では、坏形土器に、須恵器の影響による著しい変化が認められるが、いまのところ確実な共伴例は見出せない。^(注1)しかし、時期別にみると、6世紀後半の須恵器は非常に少なく、ほとんどが7～8世紀のもので、特に7世紀に入って急に例数が増しており、時期的な片寄りがある。したがって須恵器は、主体的存在となり得なかったにせよ、7～8世紀には、ある程度普及したことが伺われる。その間、須恵器の生産が行なわれたか否かは不明であるが、6世紀後半のものについては、出土数からみて、移入品と考えて誤りない。

出土遺跡別では、既に述べたように、横穴墳墓に副葬された例が最も多く、7～8世紀に属する須恵器が大半を占めることと、時期的に一致している。1基に副葬される個数は、一般に2～3個程度で、それも土師式土器と併用される場合が少なくない。横須賀市・長浜C横穴、同・鳥ヶ崎A横穴、藤沢市・折戸3号横穴、横浜市・宝泉寺横穴などはその例の一部である。横須賀市・鳥ヶ崎A横穴や同・吉井城山中横穴では、須恵器の数が多いが、追葬が行なわれたためで、同一時点における個数を示していない。古墳に副葬されたものには、川崎市・第六天古墳、伊勢原市・登尾山古墳などの例があるが、前者では長頸瓶2、聰2と土師式土器（坏形土器）1が、後者では高坏1と土師式土器（坏形土器）5が共伴しており、横穴墳墓の場合と

同じく、土師式土器との併用が認められる。また、集落址からの出土は、川崎市・末長遺跡、同・大原遺跡、湯河原町・竹の花遺跡、藤沢市・若尾山遺跡をはじめ、採録分以外にも、横浜市・三殿台遺跡、小田原市・永塚遺跡その他いくつかの例があるが、その存在は全期間を通じて、微々たるものである。

このような状態は、いずれも本地域における須恵器の普及度の低さと、後進性を反映している。

器形の種類はかなり多く、壺（長頸壺、小型広口壺、広口壺（（瓮））、台付壺）、長頸瓶、提瓶、平瓶、横蓋、器台、坏、高坏、台付坏、蓋等がある。時期によって、器形の消長と形状の変化が認められ、2～3段階に区分できると思われるが、良好な資料にとぼしく、具体的に示すことができない。

器形のうち、比較的多い種類は、坏、長頸壺、長頸瓶、提瓶等で、台付壺と器台は、特殊な存在である。

注1. 考古資料集成3「土師式土器」図版12-8・9の例参照。

注2. P.10「共伴資料表」参照。